

よしだ かずひこ
吉田 和彦外国語学部 教授
Ph.D./コーネル大学ホームページ URL
なし

主な研究業績

- "Some Old Morphological Features of Hittite Imperatives." *And I Knew Twelve Languages: A Tribute to Massimo Poetto on the Occasion of His 70th Birthday*, ed. by Natalia Bolatti Guzzo and Piotr Taracha. Warsaw: Agade. 2019.
- *Vina Diem Celebrent: Studies in Linguistics and Philology in Honor of Brent Vine* (with Dieter Gunkel, Stephanie Jamison and Angelo Mercado). Ann Arbor: Beech Stave Press. 2018.
- "On the Prehistory of Hittite *Mediopassives* in *-yatta* and *-sketta*." *100 Jahre Entzifferung des Hethitischen: Morphosyntaktische Kategorien in Sprachgeschichte und Forschung. Akten der Arbeitstagung der Indogermanischen Gesellschaft vom 21. bis 23. September 2015 in Marburg*, ed. by Elisabeth Rieken. Wiesbaden: Reichert Verlag. 2018.
- "Hittite Verbs in *-nuzi*." *Miscellanea Indogermanica. Festschrift für José Luis García Ramón zum 65. Geburtstag*, ed. by Ivo Hajnal, Daniel Kölligan and Katharina Zipser. Innsbruck: Institut für Sprachwissenschaft der Universität Innsbruck. 2017.
- "Hittite *parhattari* Reconsidered." *Tavet Tat Satyam. Studies in Honor of Jared S. Klein on the Occasion of His Seventieth Birthday*, ed. by Andrew Miles Byrd, Jessica DeLisi, and Mark Wenthe. Ann Arbor: Beech Stave Press. 2016.
- "Hittite Verbs in *-atta*." *Sahasram Ati Sraja. Indo-Iranian and Indo-European Studies in Honor of Stephanie W. Jamison*, ed. by Dieter Gunkel, Joshua T. Katz, Brent Vine, and Michael Weiss. Ann Arbor: Beech Stave Press. 2016.
- "The Thematic Vowel **-e/o-* in Hittite Verbs." *Munus Amicitiae: Norbert Oettinger a Collegis et Amicis Dicitur*, ed. by H. Craig Melchert, Elisabeth Rieken and Thomas Steer. Ann Arbor: Beech Stave Press. 2014.
- "Hittite *hu-it-ti-ti-ti*." *Proceedings of the Eighth International Congress of Hittitology. Warsaw, 5-9 September 2011*, ed. by Piotr Taracha. Warsaw: Agade. 2014.
- "The Mirage of Apparent Morphological Correspondence: A Case from Indo-European." *Historical Linguistics 2011: Selected Papers from the 20th International Conference on Historical Linguistics*. Osaka, 25-30 July 2011, ed. by Ritsuko Kikusawa and Lawrence A. Reid. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company. 2013.
- "The Weak Affix *-nī-* in Sanskrit Ninth Class Presents." *Münchener Studien zur Sprachwissenschaft* 67. 2013.
- "Lycian *xawa-* 'sheep'." *Multi Nominis Grammaticus: Studies in Classical and Indo-European Linguistics in Honor of Alan J. Nussbaum on the Occasion of his Sixty-fifth Birthday*, ed. by Adam I. Cooper, Jeremy Rau and Michael Weiss. Ann Arbor: Beech Stave Press. 2013.

研究テーマ Research theme

インド・ヨーロッパ諸語の比較言語学的研究、ヒッタイト語の歴史言語学的研究

概要 Overview

インド・ヨーロッパ系諸言語（インド・イラン、ギリシア、イタリック、ゲルマン、ケルト、バルト、スラブ、トカラ、アナトリアなどの語派に属する諸言語）は、東は中央アジア、西はアイルランドにいたる広大な地域で話されていた。これらの言語がそれぞれ分岐する以前の共通の祖先、いわゆる印欧祖語がどのような姿をしていたのかという問題に関心を寄せている。比較言語学の最も重要な課題は、同系統に属する諸言語を比較することによって祖語を再建し、祖語の段階から各分派諸言語がどのような歴史を経て成立したのかを明らかにすることである。言語の歴史的研究の分野において、研究の進展に大きな影響を与える要因のひとつは従来知られていなかった新資料の追加であり、もうひとつは新しい方法論の導入である。

ヒッタイト語ならびにその周辺の古代アナトリア諸言語に関する文献学的研究のめざましい発展は、近年の印欧語比較研究に対して、量と質の両面から以前とは根本的に異なる視点を与えている。量の面については、発掘されたヒッタイト語粘土板の数はこの30年のうちにほぼ倍になり、総数は現在約3万枚にのぼっている。また、象形文字ルウィ語、リュキア語、リュディア語などの古代アナトリアで使われていた他の印欧諸語についても、近年新資料がつつぎに発掘され、それにともない、個々の言語の解読作業やデータの言語学的解釈が着実に進展している。その結果、本格的なアナトリア比較研究が可能な段階に到達した。また質の面では、近年の文献学的研究の進展によって、粘土板に記録されたヒッタイト語が古期ヒッタイト語（紀元前1570 - 1450年）、中期ヒッタイト語（紀元前1450 - 1380年）、後期ヒッタイト語（紀元前1380 - 1220年）に時期区分されるようになった。これによって、体系的なヒッタイト歴史文法の構築が可能となった。

このように、ヒッタイト語に代表される古代アナトリアの諸言語が、印欧祖語の再建ならびに諸言語の先史の復元という問題の解明に向けてきわめて重要な鍵を担っているため、アナトリア諸語を中心に据えた比較言語学的研究を進めている。

応用分野 Application areas

言葉の世界について考える面白さを社会に伝えるための啓蒙活動にも取り組んできた。大阪府立高津高校、静岡県立富士高校、名古屋大学附属中学などに出前授業に赴くとともに、京都国際文化協会主催の日本語教師養成講座で講演を行ってきた。令和2年度には、12月4日と1月22日に京都産業大学附属高校で接続授業を行う予定である。また日本学術会議第一部（人文社会科学分野）会員として、わが国の学術の高度化に向けて内閣府に対して提言を行っている。

共同研究等へのニーズ Need for joint research

取り組んでいる研究内容と研究成果は国際的に共有されなければならないと考え、それを実践している。研究論文や研究発表・講演の大半を占める本格的な印欧語研究は、すべて英語で海外において発表してきた。またこれまで55名の海外の一線の研究者を招聘し、国際的に互いに信頼できる協力関係を築いてきた。2007年9月に国際印欧語会議、2009年9月に国際サンスクリット会議を京都大学で主催者として開催し、それぞれの会議の論文集をドイツ Hempen 社から公刊した。今後も国際的な連携のもとで研究を進めていきたい。